

—我孫子の景観を育てる会—

景観あびこ

我孫子の景観を夢みる

「我孫子の景観を育てる会」が発足して一年になる。これまで何をしてきたのか。何が変わったのか。まづ毎月一回の話し合いの出来る例会が定着した。それぞれの考え方も何かだんだん見えて来たようである。会長の佐多さんを中心にする分科会もできて、みんな勢力的に活動している。期待以上である。何よりもうれしいのは我孫子のまちの景観への感心が日毎高まっていることを実感できることである。

この国の歴史的に困ったことは、都市があってもコミュニティのない悲しさである。これをクリアすることが私たちの使命でもと思う。市民革命を経験しなかった国に生まれて、市民というよりは臣民として「君が代」を唱って天皇につくしていた血がまだ残っている。

市民は一体何をするのか。その権限と責任は何なのかをもっと明確に意識して景観に取り組んでいくことを改めて心に誓いたいと思う。

景観は戦術的に創られるものではない。それは歴史でもあり、文化である。

この間発表された我孫子市の一般会計予算をみると、明らかに景観に直接関係するものが目につく。一昨年まではわずか一千万ぐらいのものが、今年は7億にもなっている。全体の2.3%、土木費の13.5%である。

斜面林の買収費が多く占めるものであるが、これだけのウエイトを占める景観とはもうインフラの仲間入りをしたと言ってもいいのではないだろうか。景観は市民の社会資本としての市民権を得たものと私は理解したい。

景観を緑や水の自然環境だけに集中するのはいかにもつらい処だが、景観の基本は芦原義信氏がいかにも適切に指摘した「地」の部分だろう。「地」があって、点景の「図」になる構築物である「家」や「道路」がついてくるのだろう。

「地」である自然環境を戦略的に確保することは当を得たものだと考えている。

しかし皮肉な見方をするならば、神が与えてくれた自然を私たちは20世紀に習得した科学と技術という武器で破壊してしまった。今度はその科学と技術で稼いだ金で買いもどしたことになる。タイムカプセルに入った何世紀も前のダイヤモンドを今掘り起しはじめたところだ。しかしこの仕事は何十年先に完了する

富樫道廣(会員)

のかは想像もつかない。

これまで広報の担当として2回のインタビューをしたが、景観を守る人々に通ずることは、その景観に対する並々ならぬ情熱である。景観を創ることが予算で防備されたにしても、この情熱を予算化することは到底不可能である。景観が社会資本化されることは歓迎すべきことだろうが、この景観を守り育てる情熱が大変気になるところである。

先に述べた臣民的な見地からすればそれを行政に求める声になるかもしれない。しかしこれは限界があり、求めれば求めるほど予算は膨らむことになる。

景観が社会資本とはいってもハードウェアでは決してない。風に吹かれ、雨に当たられ、日に照らされるのが景観である。そこには必ず大地に立つ人間の姿が存在して、人間のいぶきが流れていることを忘れてはならない。

立法化され、予算化される景観など本来の意味からすれば全くふさわしくないのである。そうすれば景観を守り、育てるのは散歩をして、そばを食い、酒を飲む市民の仕事ということになってしまう。

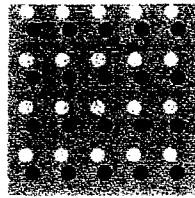
やっぱり景観を守り、育てる情熱は、いい景観にあこがれ、我孫子を愛する市民そのものに待つのがごく当然に思われる。

この仕事は気の長い仕事である。ゴールはない。つらい仕事でもある。でも我が身を化粧し、着飾ることを考えれば楽しいことばかりだ。家のおもての窓、マンションの窓から堂々と洗濯物やふとんを乾かしているなんて、下着姿でまちを歩いているのと同じだということに気がついてくれれば我孫子の化粧のしがいもあるというものだろう。

景観を考えることは夢を見ることでもある。

手賀沼のほとりを散歩して、500m間隔ぐらいに置かれた緑色のベンチ。その背中に小さな金属のプレートがついていて、寄付してくれた人の名前がほられている。沼の見晴らしのいいコーナーには何の看板もない、木づくりのカフェがあって、中には2つ3つのテーブルがある。そこでは煎茶や番茶を出してくれる。せんべいや桜もちなども売っている。自動販売機などない。それからその角から20ヤードか30ヤード沖には赤い屋根のついた白い水鳥の巣箱があって、バン鳥や鴨などがたわむれている。静かな手賀沼のひる下がりである。一なんて言うことが何十年あとに来てもらいたいと思っているところです。





お知らせ

市民講座・研修会

日時 9月21日(土)10時～12時
 場所 親水広場(水の館)3階会議室
 内容 「手賀沼・利根川・古利根を中心としたウォーターフロントと景観」
 講師 横内憲久 日本大学理工学部教授

会員の提案

風を感じる街路樹への想い

織田和子(会員)

楽しそうに市民が集うアビスタ(生涯学習センター)は、公園にとけ込み、街路樹も良く似合っています。

一方、その延長線上にある景観重点地域指定の「ふれあいライン」の中の商店街は、雑然としていて、今、多くの方々が魅力ある景観へ改善する為に努力し始めています。

又、この道路は通行車両の急増で、排気ガスの悪臭がする様になったと周辺の住宅の方々からも苦情が聞かれます。

そんな折、石原慎太郎氏と瀬戸内寂聴氏の書簡式による環境対談が注目されています。石原氏は「…多くの科学者が、このままでは人類は50～60年で滅びると…」、瀬戸内氏は「…なんと恐ろしい事でしょうか、人間の知恵で人類や地球の誤算のない存続を…」と返信。こうした地球環境の問題を身近な生活環境と重ね合わせて考えてみました。

我孫子市では、平成9年に環境条例制定、昨年は環境基本計画を策定しています。景観条例と合わせて配慮する必要があります。

そこで、景観と市民の健康の両方に有効な具体例として街路樹の整備が挙げられます。

「近代の街路樹」として研究された「ユリノキ」(もくれん科、緑黄色の鐘形の花が上向きに咲き、チューリップノキとも云われる)等は下半分は幹だけで、商店の賑わいが見え、建物の上部の雑多な毒々しい色彩等は縦長の樹冠で程良くカバーするので、ふれあいラインの両側に植栽すれば、街並に整然とした統一感を与えるでしょう。

夏には緑の葉に陽光が躍動し、木陰は涼しく、

第4回景観づくりシンポジウム

日時 12月7日(土)10時～17時
 場所 生涯学習センターアビスタ ホール
 テーマ まちなみの景観

過去3回のシンポジウムで、先ず景観とは何かを考え、次に我孫子の景観の特徴をとらえながら実際に市民参加の景観づくりを行っていく上での手法について考えてきた。そこで今回は「まちなみの景観」の具体化について考える。

内容 午前 ワークショップ
 午後 景観賞受賞者の表彰
 基調講演 西村幸夫 東大教授
 パネルディスカッション
 渥美省一氏
 (コーディネーター)
 西村幸夫氏
 斉藤啓子氏
 福島浩彦市長

秋には黄葉に哀愁が漂い、大勢通る高校生達も、自然界が見せる四季の変化と植物の生命感に豊かな感性を培われることでしょう。

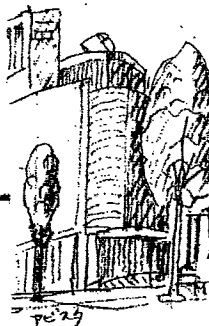
パリのシャンゼリゼに通じる、狭い通りにも、幹が細く樹冠の豊かな街路樹が並び、趣のある美しさが広がっています。

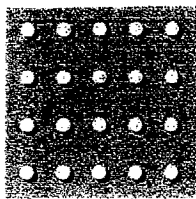
地元の「ふれあいライン」もクリスマスには、街路樹がキラキラと輝く、楽しい演出も可能です。

環境の視点からも、街路樹の効果を確認した専門家の研究を挙げてみます。(ゲシュタルト心理学、CO2検査他データから)

- ① 大気汚染物質CO2の吸収効果
特に落葉樹の葉はCO2吸収力が強く、夏には窓を開ける事が多いので有効です。
- ② 防火、地震の倒壊防止
ユリノキ、ニセアカシアは耐火性が強い。
- ③ ヒート・アイランドを防止
- ④ 視力向上や精神衛生向上の実例データがある。
- ⑤ 歩行者等を車の衝突から保護する。

景観と環境を良くする為に、街路樹を植栽し屋上や壁面も緑化する等、皆が少しづつでも努力し、協力店へは市民もこぞって購買する等、助け合って、より良い景観と環境を目指すコミュニティが生まれると良いと思います。





庭を楽しもう、そして開放的にしてみよう

佐多英昭(会員)

住宅地を散策していて気がつくことの一つに、最近家を建てる方々が、庭を通りに面して開放的に見せる工夫をしている、ということです。この様な庭造りが一つでも増えると通りがとてもよくなってきます。潤いがでてくるからです。

一昔前までは、庭をブロック塀などで高く囲い、その中で庭を造り眺めて楽しんでいました。ところが一步囲いから外に出ると、どうでしょうか、通りは高い塀が並び殺風景な風景となっていました。

自分の自慢の庭を開放的に工夫して、通りに面した所から、皆も楽しめるようにできれば、どれだけ潤いのある風景が生まれてくるかと、想像できると思います。

これからは外に向かって開放的な庭造りをする事で、通りの環境や、景観をよくし、住みよい自慢の町が出来てくるのでは

ないでしょうか。一度、開放的な庭造りをしている住宅地を見に行き、その良さを知っていただきたいと思います。



第1回『景観を守る人』インタビュー 三樹荘主・村山祥峰さん

先号でお知らせしましたように、三樹荘・村山さんのインタビューの感想をお伝えします。

《インタビューを終えて》

早春ともいえる昼下がり、お話を聞く前、きれいに掃除のゆきとどいた三樹荘の庭に立ってみると、三本の椎の木の間から見えた手賀沼は今ではなく、無残にも新たに建てられた近代的な我孫子の誇る「生涯学習センター」が視野を遮っている。

村山さんが感激した10万坪の風景は今やここになく、人間の根元的な営みになってしまった科学と技術の表現が、自然と環境とを破壊している具体的な過程を見る象徴的な思いがした。

インタビューをさせてもらって、この三樹荘の景観に寄せる村山さんの情熱をひしひしと感じたものである。この当主を得て三樹荘も幸せだったと思った。いや三樹荘だけでなく、我孫子が立派な財産を持ち続けることができたわけである。もしこれが心ないデベロッパーの手にかかり、バブルの経済成長のツールにでも使われたのなら、我々の議論の焦点にはなかったはずである。

三樹荘を美しく維持しようとする村山さんの並々ならぬ熱い心を聞いて、美しい景観とは内なる心の現われでもあることを知った。

初代の住人柳宗悦はこの風景を「朝日はとくにかぐわしい光と熱とをここに送ってくれ

る」と表現した。そして、自分の心を落ちつかせてくれるのは「東西四里にわたって前に横たわる手賀の沼の水だ。その静穏は限りない深さを表現している」と。ここで柳夫人、柳兼子はピアノを伴奏にオペラの習練にはげんだ。今、家の中からアルトのアリアが聞こえそうな気もする。

この三樹荘が天神坂を含めて村山さんのうちでは次の世代に受け継がれないという。このようなすばらしい景観を維持するには物理的な労力や財政の支援以上にこれにかける熱い心をみる思いがした。

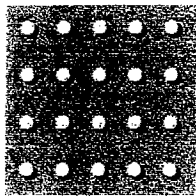
いつかこの景観が行政の手に委ねられる日がくるのかも知れない。行政に熱い心を求めるのは無理な注文かも知れない。複数でもいい、熱い心の持ち主の市民が何らかの形でいつまでも我孫子の心の財産を支援する体制をつくれなにかと思った。

編集子が景観賞受賞を記念して天神坂のスケッチを贈ったところ、村山さんは返歌3首を色紙に書いてくださった。

景観賞に輝^{みち}く経は石の道
椎の実降る緑雨の道

天神の坂益々彩添えて
上り下りの人々ことほぐ

三樹荘の椎の実降る石の道
美しき道になりけるかも



『景観を守る人々』～インタビュー～ 第2回 根戸城址の住人・日暮朝納さん

インタビュー

2回目のインタビューは我孫子の西端・歴史・文化と緑の保全地区でもある根戸城址の日暮さんをお訪ねした。たまたまこれまで景観行政で顔なじみの都市計画課にいた日暮正巳さんがその御子息だったこともあり、彼が同席してくださった気安さもあって、お話は景観そのものよりも、根源的な農業政策についての議論に熱が入ってしまったくらいもあった。(5月8日午後。担当：富樫、織田、清水)……まず個々にお住まいのいきさつから教えて下さい。

根戸城は本当の築城者も城主名も資料がなく分かっていませんが、私は7代目で、小野家(旧日暮家)からの分家で、本家は手賀沼沿い水天宮近くの名主邸です。本家から分かれてここに住みました。

……この辺は開発された農地でしょうか

ここは今農振地域(編集注:農業振興地域の整備に関する法律に基づき指定される地域で、総合的に農業の振興を図ることが必要と認められる地域)になっていますが、もとは開墾地の田んぼだったところです。根戸新田といいました。

それが、このこの3・5・15線の道路ができて、沼と田んぼは遮断されてしまいました。

田んぼは畑になってしまい、湧水があつて、100m間隔にあった水路もなくなってしまった。かえるも、ホタルもいなくなりました。

稲作するにはポンプで水をくみ上げなければなりません。

私は今、利根川の方で1町の田んぼを作っていますが、機械でやりますが作業は1日で終わります。ところがここでは1～2反が3日も4日もかかる。全くザルに水をくんでみたいのです。

……それまでして稲作をする気持ちとは一体なんなのでしょうか。

それは農家の意地とでもいうのでしょうか、田んぼを作って自分が食うだけの米は作る。先祖から受け継いだ土地を離すものでない。農地を離すことは近所にも迷惑のかかることだと思っているからです。

……そんな農家ばかりだったら我孫子の景観は悪くならないと思うのですが。道路を作ることに反対する農家はいなかったんですか。

道路ができることによって現金が入るからです。それ程農家は現金に弱い。誰も反対する人などいなかった。環境のことなど考えてもみなかった。農業用水は考えたがパイプを通せばいいと思っていた。それが結局には田んぼを壊すことになってしまった。手賀沼改良区になっていてもここは湖北や新木などの大がかり

りに国や県の費用でほ場整備された農地とは異なる。自然のままの開墾地だった。

……昔は美しい沼だったでしょう。

今は大堀川の河口に大きな山ができてしまいました。昔は砂地で東京の林間学校などがあつた。飛び込み台などの施設があつて、ここから裸になって泳ぎに行ったものです。夏には近在からも人が集まってきました。水に入ると深く、底はつめたい。水が湧いていました。

つりざおに針を三本つけてもすぐかかる。楽しみを味わう所でした。

……地図でみると根戸城址の標示はあるのですが、どこから入ったらいいのかわからないという人が多い。

特別なP.Rをするつもりもありませんが、手賀沼八景の候補になったり、トラストの人達の集まりもあります。とりあえず家に来てもらっています。

タクシーの運転手が駅前に標識でもだしてくれればいいといつてきますが、それは行政が将来のビジョンを打ち出すことが大事だと思います。前から歴史・文化の緑の保全地区とはいいいながら何も具体的な行動がない。

……これだけ広い山を一軒の家で管理をするには並大抵のことではないと思います。

これまで観光農園をやってきました。都会からバスに乗って大勢の子供たちが来てイモ掘りなど農業体験や自然とふれあう機会を提供してきました。電車に来て、切符の買い方なども勉強していく。子供たちが東京からこんな近くにこんな美しいところがあつたと言つて帰ると、今度は必ず親たちがやってくる。

山に上る階段は丸井の福祉会がつくってくれたものです。丸井の社内の組織で柏だけでなく、大宮や横浜などの遠くからもやってくる。日本ナショナルトラストの本部が調整をして費用を出してくれています。今年は桜の木を買つて植えてくれました。ありがたいことです。

……これから将来に向かってどんな青図がありますか。

県立印旛手賀自然公園でもあるのですから市も県もどうするのか明確なビジョンを出してもらいたい。

柏はすぐそこまで「ふるさと公園」があるのにこっちは切れてしまっている。歴史公園として都市マスに入っているのであれば具体的に動いてもらいたい。

……困ったことは

トラックでやってきてゴミを捨てていくことです。地元の人ではないが、昼にやってきて様子をよくみて、夜暗いときに捨てていく。何を捨てるのか今度展示会をするつもりですが、ありとあらゆるもの、とくに重いもの、水に沈むもの、エアコン、冷蔵庫、何でもあります。前は向こうに見える沼南病院の前がひどかったが、この頃はこっちに移ってきた。

……どうも長時間ありがとうございました。